

年末、一歳八ヶ月の息子がカゼをひいた。寒風の中で遊ばせた日の夜、鼻水が出るようになった。翌々日には微熱が出てきて、つらそうな感じとなった。咳もする。何回か軽く鍼治療をし、保温等に気をつけた。表面的な熱はなくなり、つらそうな感じは減った。だが、痰がからんだ咳を時々する。不機嫌になりやすく、食欲がない。背側に手をかざして診ると、肩甲骨の間から強い〈気〉の放射を感じる。熱気がこもっている。カゼは気管支に入り込んで、ほぼそこだけに居座っている。そこで麻杏甘石湯証と判断した。麻杏甘石湯という薬方を作って煎じ、飲ませた。

「証」というのは、どの薬方が使えるかという観点から見た病の形である。「湯」というのはスープのことで、それぞれの薬方に応じて数種類の薬味(生薬)を煮出した液をいう。漢方薬にはこういう形の他に、粉にした散薬やそれを固めた丸薬もある。

麻杏甘石湯は麻黄、杏仁、甘草、石膏という薬味からなる薬方である。カゼが治まったかに見えるが、胸の奥にカゼによる熱気と水気が残り、それによって咳などの症状がある場合に使う。息子の胸の熱気はそれ程でなく、水分もそれ程欲しがらなかったので、石膏は通常より少なくした。「匙加減」である。石膏は身体の奥の熱気を取り、熱気によるノドの渴きや煩わしさを除く役目をする。

息子のカゼの変化を粗述してみる。先ず寒風により冷えて免疫力が落ちたのに乗じて、カゼのウイルスが暴れ出して、鼻水などの症状が出始めた。鼻・口周辺が軽い戦場となっている状態(①)である。カゼはこの戦いに勝って、胸の方に侵入していった。戦いはやや本格的になって、熱気が胸から上全体に広がった(②)。この時点で私は鍼でカゼの力を弱めて息子の免疫力に加勢した。果たして、

カゼはほぼ胸の奥に残る状態となった。

この経過はだいたい典型的なカゼの侵攻の仕方であり、その段階によって、使う漢方薬は変わってくる。①の段階ならば、桂枝湯類。②の段階ならば麻黄湯類となる。一般に漢方のカゼ薬として知られている葛根湯は位置的には①と②の中間で特に肩周辺が凝ってカゼを発散できない場合に使う。

桂枝湯には桂枝、芍薬、大棗、生姜、甘草が入っており、麻黄湯には麻黄、杏仁、桂枝、甘草が入っている。分量の違いを無視して見ると、葛根湯は桂枝湯+葛根+麻黄という薬方である。

薬味の役割を大雑把に見てみる。三方すべてに入っている甘草は、諸薬味を調和する。桂枝は頭痛など上方に症状がある場合に使う。芍薬、大棗、生姜は循環不順を改善して生体活動を高める。麻黄、杏仁は胸に作用する。葛根は肩周辺の凝りを緩める。

こうした各薬味の役割を知った上で、薬方を眺めてみれば、カゼの変化に対応して、成り立っていることが分かります。

漢方には西洋医学とは違う病のとらえ方があり、それに合った薬方がある。カゼだから葛根湯というのは決して漢方ではない。基本的な病の形に応じて薬方があり、更に実際の状態に応じて薬味を加減することで様々な病の形に合わせるのが漢方である。肝臓に良いからウコンを飲むというのは決して漢方ではない。

漢方という伝統的な知恵が正しく身近なものとして蘇って欲しいと思う。それは同時に常識化した西洋医学的な身体観や病気観を見直すことにつながるだろう。

(2004年1月小寒)

参考：『傷寒論真髓』(横田観風)

